韓国映画に見るベトナム戦争の記憶

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 春香 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6200

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

韓国映画に見るベトナム戦争の記憶

South Korea's Memory of the Vietnam War: Focusing on the Korean Movies

松　田　春　香

はじめに

大韓民国（以下、韓国と記載）は、軍人出身の朴正熙（パクチョンヒ）[1] 政権下、1964 年 9 月から 73 年 3 月まで延べ約 32 万人の兵士をベトナムに派遣した。その規模は、アメリカ合衆国（以下、米国と記載）に次いで二番目に大きい（表 1 参照）。

韓国ではベトナム戦争をどのように記憶してきたのか。本稿は、2011 年に発表した拙稿「韓国におけるベトナム戦争の記憶」[2] を加筆・修正した、いわば「続編」である。拙稿の文末には、「ベトナム戦争の『加害』を含む負の側面も韓国の『公的記憶』になり得るのか、今後が注目される」（305 ページ）と書いた。「今後」について、韓国のベトナム派兵を題材とした映画をもとに、考察したい。日本を代表する国際政治学者・藤原帰一の言葉を借りれば、「映画が時代の顔を表してきたとすれば、映画を通してその顔の変化を追いかけることもできるのではないか」[3] という問題意識から今回映画を取り上げることにした。

韓国におけるベトナム戦争を扱った映画に関しては、寺脇（2007）などの評論[4] にて、これまでも紹介されてきた。ところが、韓国のベトナム戦争映

---

[1] 1917-79.10.26　韓国の軍人・第 5 - 9 代大統領（和田春樹ほか編集『岩波小事典　現代韓国・朝鮮』岩波書店、2002 年、219 ページ）。

[2] 和田春樹ほか『東アジア近現代通史　第 8 巻―ベトナム戦争の時代』岩波書店、2011 年所収。

[3] 藤原帰一『映画のなかのアメリカ』（朝日選書）朝日新聞出版、2006 年、iii ページ。

[4] 『ハーツ・アンド・マインズ　ベトナム戦争の真実』映画公式パンフレット（2015 年）の「ベトナム戦争関連映画主要作品リスト」には、『ホワイト・バッジ　3 ／戦狼たちの墓標』（1990 年）『ホワイト・バッジ 2 ／戦場の青き狼たち』（1991 年）『ホ

画という「縦軸」から考察したものはさほど多くないため、本論文では分析を試みることにした。

本稿の内容は、以下の通りである。まず、韓国がベトナム戦争へ参戦することになった経緯を簡単に述べる。韓国政府や社会がベトナム戦争をどのように記憶してきたのか、論証する。そして、韓国映画が描くベトナム戦争像を考察したい。

韓国のベトナム参戦

1961 年 11 月、軍事クーデーター後に訪米した朴正熙は、ケネディ（John F. Kennedy）米大統領との首脳会談にて、韓国軍のベトナム派兵を提案した。これに対して、ケネディは謝意を表明しながらも、現段階では米国はベトナムへの軍事介入はしないと述べ、断った[5]。

ベトナム情勢が深刻化するにつれ、ジョンソン（Lyndon B. Johnson）米大統領は、1964 年「南ベトナム自由世界援助計画（Free World Assistance to South Vietnam、通称「より多くの国旗を（More flags Campaign）」キャンペーン）を開始した。米国の単独介入ではなく、より多くの同盟国を戦争に参加させる目的であった。米国政府の要請に基づき、64 年 9 月に一個中隊移動外科病院将兵 130 人とテコンドー教官団 10 人の派遣、65 年 2 月の工兵隊 2,000 人の非戦闘部隊に続き、米国のベトナム本格介入後の同年 10、11 月には陸軍「猛虎（メンホ）」部隊、海兵隊「青龍（チョンニョン）」部隊などの戦闘部隊が戦地に赴いた。

ベトナム派兵は安全保障・経済面で利益を得るための選択だったと言われる。一方、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と記載）の航空兵 200 人も参戦したが、詳細はさほど分かっていない[6]。韓国軍の人的被害は大きく、

ワイト・バッジ』（1992 年）『ラブストーリー』（2003 年）『R-POINT』（2004 年）『あなたは遠いところに』（2008 年）が紹介されている。

[5] Memorandum of Conversation, Washington, November 14, 1961, 3:30-4:50 p.m, *Foreign Relations of the United States*, 1961–1963, Volume 22, Northeast Asia, Document 247　https://history.state.gov/historicaldocuments/frus1961-63v22/d247（アクセス日：2016/01/12）

[6] 数少ない先行研究である宮本（2003）によれば、北朝鮮がベトナム民主共和国（以下、北ベトナムと記載）を支援したのは、朝鮮労働党とベトナム労働党が 2 つの共通目的を持っていたためであるという。その目的とは、社会主義陣営の団結と朝鮮

戦死者 5,000 余人、負傷者約 1 万 1000 人に上る。

表 1　各国のベトナム派兵規模（単位：人）[7]

参戦国	1966 年	1967 年	1968 年	1969 年	1970 年	1971 年	1972 年
アメリカ	388.568	497,498	548,383	475,678	345,074	156,975	29,566
南ベトナム	616,996	630,812	820,629	940,080	1,032,335	1,043,232	1,087,376
韓国	45,605	48,839	49,869	49,755	48,478	45,663	37,438
タイ	224	2,242	6,009	11,568	11,606	6,625	38
オーストラリア	4,533	6,597	7,492	7,643	6,793	1,816	128
フィリピン	2,063	2,021	1,593	189	74	57	47
ニュージーランド	155	534	526	189	416	60	53
台湾	30	30	29	29	31	31	31
スペイン	12	13	11	10	7	—	—

韓国における「公的記憶」

共産主義国家・北朝鮮と対峙する韓国の「公的記憶」では、ベトナム戦争は「正義の戦争」であり、経済発展をもたらしたという見方が依然根強い。大統領府（青瓦台）主導の下、1994 年に完成した戦争記念館（ソウル市竜山区）の「海外派兵室」内の展示では、「自由ベトナム〔南ベトナム〕に対する共産侵略行為は」韓国にも大きな危険であったため、韓国は「自由友邦の十字軍」として出征し、「誇りと遣り甲斐を持つ契機」となったと説明されている。また、同室には「ベトコン」〔南ベトナム解放戦線〕を掃討する韓国軍の模型も多数展示されている。

2008 年、ベトナム派遣前の韓国軍兵士の訓練場であった江原道華川郡（カンウォン　ファチョン）に「ベトナム参戦兵士出会いの場」という大きな施設が作られた。屋外にはクチトンネル〔ベトコンの有力な拠点〕やベトナムの伝統家屋などが再現されている。また、付設記念館の展示には、派兵に伴う「ベトナム特需」が国家のその後の発展へ大きな影響を与えたと書かれ、2010 年発行の複数の高校

半島やベトナムからの米軍撤退という 2 点である。また、2011 年には、北朝鮮がベトナム戦争に空軍操縦士を派兵した事実を確認できる文書が米国のシンクタンク「ウッドロー・ウィルソンセンター」で公開された（中央日報日本語版〈http://japanese.joins.com/article/192/146192.html〉（アクセス日：2016/01/12））。

[7] 木宮正史『国際政治のなかの韓国現代史』山川出版社、2012 年、69 ページより再引用。

『韓国近・現代史』教科書の記述とも共通する。

ベトナム戦争当時、米国防長官だった故ロバート・マクナマラ（Robert S. McNamara）は、自著[8]の中でベトナム戦争は誤りだったと述べた。生井（2000）、油井（2008）が精緻に考察したように、米国社会は、ベトナム戦争を「負けた戦争」として記憶している。その上、「第二のベトナム」を恐れる傾向がある[9]。

一方、韓国では、「負けた戦争」とは認識されていない。また、当時の韓国政府高官が公式に戦争介入を否定したことはない。例えば、初代派越韓国軍司令官の蔡命新（チェミョンシン）は、回顧録（2006年）[10]の中で韓国軍のベトナム参戦は国威宣揚と経済力向上をもたらした、と肯定的に見ている。

米韓が支援した南ベトナムが敗北し、戦争が終結した1975年以降、戦争当時指揮官として活躍した全斗煥（チョンドゥファン）（「白馬（ペンマ）」部隊）、盧泰愚（ノテウ）（「猛虎」部隊）の軍事政権が続いた韓国では、特に戦争の負の側面について語ることは、社会的タブーであった。

韓国社会とベトナム戦争の記憶

（1）民主化後　韓国軍兵士の「被害」が表明化

韓国が民主化した1980年代後半から90年代前半にかけて、ベトナム従軍経験を持つ作家たちが自伝的小説（安正孝（1989）『ホワイト・バッジ』[11]など）を通じて従軍兵士の精神疾患などの影の部分を提起した。92年には、同名で映画化された。79年の韓国を舞台に、ベトナム戦争に参戦し、帰還した兵士たちの後遺症を通じて、戦争がもたらした悲劇を描いた作品である。観客動員数は、ソウルだけでも17万6,851名を記録する[12]ヒット映画と

---

[8] ロバート・マクナマラ『マクナマラ回顧録―ベトナムの悲劇と教訓』仲晃訳、共同通信社、1997年。

[9] 詳しくは、松岡完『ベトナム症候群―超大国を苛む「勝利」への強迫観念』（中公新書）中央公論新社、2003年参照のこと。

[10] 채명신（蔡命新（チェミョンシン））『채명신 회고록 베트남전쟁과 나（蔡命新回顧録　ベトナム戦争と私）』팔복원 , 2006년 .

[11] 安正孝『ホワイト・バッジ』金利光訳、光文社、1993年。

[12] 한국영화데이터베이스（韓国映画データベース）〈http://www.kmdb.or.kr/vod/vod_basic.asp?nation=K&p_dataid=04579&keyword=%ED%95%98%EC%96%80%20%EC%A0%84%EC%9F%81#url〉（アクセス日：2016/01/11）

なった。

韓国とベトナムが国交正常化した1992年には退役軍人の枯葉剤被害も表面化し、韓国人の「被害」問題が着目され始めた。1993年に施行された枯葉剤被害者救済法に基づいて患者の認定作業も行われるようになった。また、1994年にはいると、ダウケミカルなど、米国の化学企業各社に対する韓国帰還兵組織の訴訟も始まった[13]。

民主化されてようやく韓国社会において、韓国人兵士の「被害」問題が取り沙汰されるようになった。

(2)「加害」へのまなざし

ベトナム戦争時の「加害」問題に韓国社会が向き合うようになった契機は、1999年から始まった韓国軍のベトナム民間人虐殺に関する週刊誌『ハンギョレ21』の連載記事である。その中心的役割を果たし、今も虐殺の被害者やその遺族への支援などの謝罪と和解の活動を続けるNGO「ナワウリ(나와 우리)」〔私と私たちの意味〕が設立当初の1998年、メンバーが日本の「ピースボート」に参加した。その際、ベトナム人被害者から直接韓国軍の民間人虐殺の証言を聞いたのをきっかけに、ベトナム問題に取り組み始めた。

「ナワウリ」は、「同時代をともに生きていく多様な存在が平和に共存するためには、多様性を認める文化を作り出していることが何よりも重要だ」[14]という考えから、創設された。移住労働者問題、障害者問題、飢えた北朝鮮「同胞」の問題などを念頭に置いていたという。

1999年4月、ベトナムを訪れた「ナワウリ」は、ベトナム国家大学ホーチミン市校で「韓国軍のベトナム戦争介入」を研究していた具秀姃(クスジョン)[15]と合流

---

[13] 中村悟郎『グラフィックレポート　戦場の枯葉剤被害―ベトナム・アメリカ・韓国』岩波書店、1995年、123ページ。

[14] 金賢娥(キムヒョナ)(2009)『戦争の記憶　記憶の戦争―韓国人のベトナム戦争』安田敏朗訳、三元社、2009年、38ページ。

[15] 1966年生まれの彼女は、韓国民主化運動期は大学生で活動家だったが、1992年末の大統領選で金大中が敗北、学生運動が方向性を見失ったため、社会主義がどのようなものであるか見ようと同年末に国交回復したベトナムに渡ったという(伊藤正子『戦争記憶の政治学―韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』平凡社、2013年、21ページ)。

し、韓国軍の民間人虐殺があった地域で聞き取り調査を行った。

具秀姃は、韓国軍による民間人虐殺を調べたベトナム当局の内部文書を入手したことをきっかけに、調査を始めた。「妊婦や子どもを殺したという内容に驚いた。生き残った人から話を聞き、文書の内容が間違いのないことを確認した」[16]。自らの聞取りをもとに虐殺の被害が少なくとも 9000 人に及ぶと具秀姃はみている。

『ハンギョレ 21』（1999.5.6）には、民間人虐殺被害者の証言を掲載した。同誌は連載と共に、募金運動を行い、同誌に民間人虐殺の証言を寄せる元参戦兵士も出てきた。マスメディアを通じて自ら「告白」したケースは、これまでほとんど見られなかった。

その後、多くの「386 世代〔1990 年代に年齢が 30 代で、80 年代に大学生時代を過ごした 60 年代生まれ〕」が参与した NGO「ベトナム戦真実委員会」は、真相究明と並行して現地での慰霊碑建立や合同慰霊祭などを実施し、韓国における戦争の「公的記憶」に異議を唱えた。2003 年、かつて多くの韓国軍駐留したベトナム中部フーイエン省に「平和公園」を建設した[17]。ベトナム研究者の伊藤正子によれば、NGO による試みにより、「韓国人を恨む気持ちはなくなった」[18] と述べるベトナム人もいるという。

しかし、これら市民運動への韓国国内の反発は根強く、2000 年 6 月には 2,400 人を超す「枯葉剤後遺症戦友会」のメンバーらがハンギョレ新聞社に押し掛け、活動に抗議した。政府からの傷病手当が不十分だという不満も行動の一因とみられる。

韓国映画が描くベトナム戦争

1999 年以降、韓国社会において、自国の「加害」という過去と真剣に向き合う市民運動が展開されてきた。しかし、これらはどれほど一般の韓国人の認識に影響を与えたのか。市民運動後に制作されたベトナム戦争を題材とする 2 つの映画を考察することにより、この問いに答えたい。

---

[16] 朝日新聞取材班『歴史は生きている―東アジアの近現代がわかる 10 のテーマ』朝日新聞出版、2008 年、222 ページ。

[17] その経緯に関しては、〈http://legacy.h21.hani.co.kr/h21/vietnam/vietnam.html〉を参照のこと。

[18] 伊藤、前掲書、113 ページ。

(1)『あなたは遠いところに』(2008)

ベトナムに出征した夫を捜すため韓国軍の慰問公演団のシンガーとなった女性の姿が、当時の流行曲に乗せて綴られた映画である。女性の視点から戦争が描かれたという点に、これまでに見られなかった大きな特徴がある。当時韓国における全国観客動員は、100万人を突破[19]した。「もう一度観るつもりです。とても面白かった。本当にまた見なければなりません。私の母は涙まで流した」[20]というコメントからも分かるように、特に中高年層の観客から大反響があったという。

劇中では、慰問公演団のメンバーがベトコンにとらえられた際、

「俺たちは金を稼ぎに来ただけだ。」〔メンバー〕
「パク・チョンヒの軍隊と同じというわけだな。」〔ベトコン〕

というセリフが出てくる。ベトコン側の人間が登場し、生活実態や交流までもが描かれている。上記のやり取りは、韓国のベトナム参戦の評価に関して言及した唯一のものと言って良い。経済的実利に基づいて韓国が派兵を行った、という「公的記憶」を暗に批判する意図を読み取ることができるが、映画のメインテーマではない。

(2)『国際市場で逢いましょう』(2014)

一人の男性(ドクス)が経験した朝鮮戦争(1950-53年)、旧西ドイツへの炭鉱動労者の派遣、ベトナム派兵、離散家族再会と、50年代から現代までの激動の歴史に翻弄されながらも必死に「家長」として生きた半生を描いた映画である。観客動員1,410万人を超え、韓国歴代2位の大ヒット[21]を記録した。

南ベトナムへ技術者として派遣された主人公が、ベトナムの子供が米兵からチョコレートをもらうのを見て、幼い頃の自らの姿と重ね合わせて懐かし

---

[19] 韓国情報発信基地！ innolife.net〈http://contents.innolife.net/news/list.php?ac_id=6&ai_id=87427〉(2008/07/30)(アクセス日：2016/01/10)

[20] 韓国情報発信基地！ innolife.net〈http://contents.innolife.net/news/list.php?ac_id=6&ai_id=87530〉(2008/08/01)(アクセス日：2016/01/10)

[21]『国際市場で逢いましょう』映画公式パンフレット参照。

んでおり、朝鮮戦争とベトナム戦争という東アジアの二つの悲劇を重ね合わせてみている。また、ベトナムの避難民を助けるなど、ベトナム人への同情も垣間見ることが出来る。

ユン・ジェギュン監督は、「あえて政治的な内容は省いた」[22] と述べ、映画全体では、韓国のベトナム参戦に関する歴史的評価はしていない。

『国際市場で逢いましょう』[23]

おわりに

軍事政権が長らく続いた韓国では、ベトナム戦争の特に負の側面を語ることはタブーであった。民主化後の 1990 年代、ベトナム戦争を扱った韓国映画は、韓国軍兵士の精神疾患という自らの「傷」を取り上げたもの（『ホワイト・バッジ』など）であった。

自国の「負」の側面と向き合おうとする市民運動が展開された後の 2000 年代、ベトナム戦争を扱った映画でも「公的記憶」を暗に批判し、またベトナム人への視点を含んだものへと内容に変化が見られた。しかし、歴史の暗部にまで鋭く切り込んだものではない。なぜなら、米国とは異なり、現在も北朝鮮と対立する韓国には、「負けた戦争」であるという認識がないからで

---

[22]『AERA』2015.5.4-11、42 ページ。

[23] 映画．com〈http://eiga.com/movie/81686/〉（アクセス日：2016/01/11）.

ある。また、「加害」を含む負の側面が韓国社会で広く共有されているとは言い難いのが現状である。

ベトナム戦争期特派員であった亀山旭が指摘したように、「他国へ軍隊を派遣し、他民族を殺したことの代償は、日本人が36年の朝鮮支配という民族的責任から逃れることができないように、韓国人自らが支払わなければならない」[24] 課題であろう。

映画作品リスト（制作年代順）

『ホワイト・バッジ 3／戦狼たちの墓標』머나먼 사이공　ファン・ドンジュ監督（1990年）
『ホワイト・バッジ』하얀전쟁　チョン・ジヨン監督（1992年）
『ラブストーリー』클래식　クァク・ジェヨン監督（2003年）
『R-POINT』알 포인트　コン・スチャン監督（2004年）
『大統領の理髪師』효자동 이발사　イム・チャンサン監督（2004年）
『あなたは遠いところに』님은 먼곳에　イ・ジュニク監督（2008年）
『国際市場で逢いましょう』국제시장　ユン・ジェギュン監督（2014年）

参考文献

朝日新聞取材班『歴史は生きている―東アジアの近現代がわかる10のテーマ』朝日新聞出版、2008年。
安正孝『ホワイト・バッジ』金利光訳、光文社、1993年。
生井英考『負けた戦争の記憶―歴史のなかのヴェトナム戦争』三省堂、2000年。
伊藤正子「韓国軍のベトナム派兵をめぐる記憶の比較研究―ベトナムの非公定記憶を記憶する韓国NGO」『東南アジア研究』第48巻第3号、2010年12月、294-313ページ。
伊藤正子『戦争記憶の政治学―韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』平凡社、2013年。
李泳采・韓興鉄『なるほど！これが韓国か―名言・流行語・造語で知る現代史』朝日新聞社、2006年。
亀山旭『ベトナム戦争―サイゴン・ソウル・東京』岩波新書、1972年。
木宮正史『国際政治のなかの韓国現代史』山川出版社、2012年。
金賢娥『戦争の記憶　記憶の戦争―韓国人のベトナム戦争』安田敏朗訳、三元社、2009年。
金栄鎬「韓国のベトナム戦争の『記憶』―加害の忘却・想起の変容とナショナリズム―」『広島国際研究』第11巻、2005年、1-30ページ。
拙稿「韓国におけるベトナム戦争の記憶」和田春樹ほか『東アジア近現代通史　第8巻―ベトナム戦争の時代』岩波書店、2011年、304-305ページ。

[24] 亀山旭『ベトナム戦争―サイゴン・ソウル・東京』岩波新書、1972、141ページ。

寺脇研『韓国映画ベスト 100―「JSA」から「グエムル」まで』（朝日新書）朝日新聞社、2007 年。
中村悟郎『グラフィックレポート　戦場の枯葉剤被害―ベトナム・アメリカ・韓国』岩波書店、1995 年。
韓洪九『韓国現代史―韓国とはどういう国か』高崎宗司監訳、平凡社、2003 年。
韓洪九『韓国現代史 2―負の歴史から何を学ぶのか』高崎宗司監訳、平凡社、2005 年。
黄晳暎『武器の影　上・下』高崎宗司ほか訳、岩波書店、1989 年。
藤原帰一『戦争を記憶する―広島・ホロコーストと現在』（講談社新書）講談社、2001 年。
藤原帰一『映画のなかのアメリカ』（朝日選書）朝日新聞出版、2006 年。
松岡完『ベトナム症候群―超大国を苛む「勝利」への強迫観念 』（中公新書）中央公論新社、2003 年。
宮本悟「朝鮮民主主義共和国のベトナム派兵」『現代韓国朝鮮研究』第 2 号、2003 年 2 月、58-67 ページ。
油井大三郎『なぜ戦争観は衝突するか―日本とアメリカ』（岩波現代文庫）岩波書店、2007 年。
油井大三郎『好戦の共和国アメリカ―戦争の記憶をたどる』（岩波新書）岩波書店、2008 年。
ロバート・マクナマラ『マクナマラ回顧録―ベトナムの悲劇と教訓』仲晃訳、共同通信社、1997 年。
和田春樹ほか『岩波小辞典　現代韓国・朝鮮』岩波書店、2002 年。
채명신（蔡命新）『채명신 회고록 베트남전쟁과 나（蔡命新回顧録　ベトナム戦争と私）』팔복원 , 2006 년 .

『ハーツ・アンド・マインズ　ベトナム戦争の真実』映画公式パンフレット（2015 年）
『国際市場で逢いましょう』映画公式パンフレット（2015 年）
『AERA』2015.5.4-11